〈推薦図書〉

メディア研究分野のお勧め図書

河　島　茂　生

J.L.ボルヘス，鼓直訳,「バベルの図書館」『伝奇集』岩波書店，1993，p.103-117.

ボルヘスは、いわずとしれた20世紀を代表する作家である。しかし、それだけでなく、図書館をこよなく愛した作家だった。司書として図書館で働きながら、執筆活動を行っていた。政治的な問題から司書の立場を追われたが、晩年に国立図書館長に着任した。

宇宙は、図書館である。そして、「図書館は永遠を超えて存在する」。

マーシャル・マクルーハン&クエンティン・フィオーレ，南博訳，『メディアはマッサージである』河出書房新社，1995，177p.

私は、大学に進学すべきかどうか迷っていた時期があった。そんなとき、ある人にマクルーハンを紹介された。神戸のジュンク堂書店で何時間もマクルーハンの本を読んだ。なんとも言えない感覚に襲われた。大学の進学を決めた。そして、いまでも大学に居座っている。いつも不安になる。私は、研究者として、メディアのメッセージを読み解けているだろうか?と。

ロバート・M.パーシグ，五十嵐美克・児玉光弘訳，『禅とオートバイ修理技術』めるくまーる社，1990，692p.

テクノロジーに接するとき、いかなる態度で臨むか。テクノロジーは、きわめて世話がやける。コンピュータも、しょっちゅうメンテナンスしなければならない。いま、私のコンピュータは、ハードウェアの調子が悪く、新たに取り換えなければならない状況にある。正直なところ、苛立ちが積もる。しかし、

この本で書かれていることを思い出すと気持ちが落ち着くから不思議なものである。「121人の編集者に断れた末、ようやく出版されるやたちまち全米ベストセラーとなったいわくつきの名著の完訳」（帯書きより）。

ローレンス・レッシグ，山形浩生・柏木亮二訳,『CODE』翔泳社，2001，449,52,7p.

1人で座るには丁度よい手すりが公園のベンチに据え付けられるようになった。図書館の出入口には、万引き防止の機械に似た装置が備え付けられるようになった。門は、金属製が多い。なぜだろうか。アーキテクチャは、人々の行動を縛る。インターネットは、アーキテクチャの塊である。そのアーキテクチャのあるべき姿を考えてもらいたい。

テッド・ネルソン，ハイテクノロジー・コミュニケーションズ株式会社訳，『リテラリーマシン』アスキー，1994，アスキー，406p.

ネルソンに初めて会ったのは、コンビニだった。買い物かご一杯にビールを入れていた。思わずのけぞった。ネルソンがママチャリを漕いでいた。追いかけた。見失った。速すぎた。あるとき、深夜にネルソンの研究室の前を通りかかった。奇声を発していた。なにかアイデアを思いついたようだった。

ネルソンは、きわめて型破りな男である。しかし、その思考がいまのインターネットの方向性を照らしだしたのは間違いない。

西垣通『ウェブ社会をどう生きるか』岩波書店，2007，182p.

ウェブ社会のありさまは、めまぐるしく変動することもあってか、なにか断片的で短視眼的に語られることが多い。とはいえ、体系的かつ長期的な眼差しでウェブ社会を捉えなくては、その本質を見失ってしまう。

本書は、体系的かつ長期的な視座から、現在のウェブ社会の問題点を指摘し、来るべき道を指し示す好著である。